事前資料５

就労準備支援事業（任意事業）の実績（令和４年12月末時点）

＜事業の概要＞

一般就労に従事する準備としての基礎能力の形成を目的として、生活リズムを整える、他者と適切なコミュニケーションを図ることができるようにするなどといった日常生活自立・社会生活自立に関する支援から、就労体験の利用の機会の提供等を行いつつ、一般就労に向けた技法や知識の習得等を促すといった就労自立に関する支援までを計画的かつ一貫して提供します。

１　支援実績

【図表1】就労準備支援事業利用者に対する支援状況（全6件）

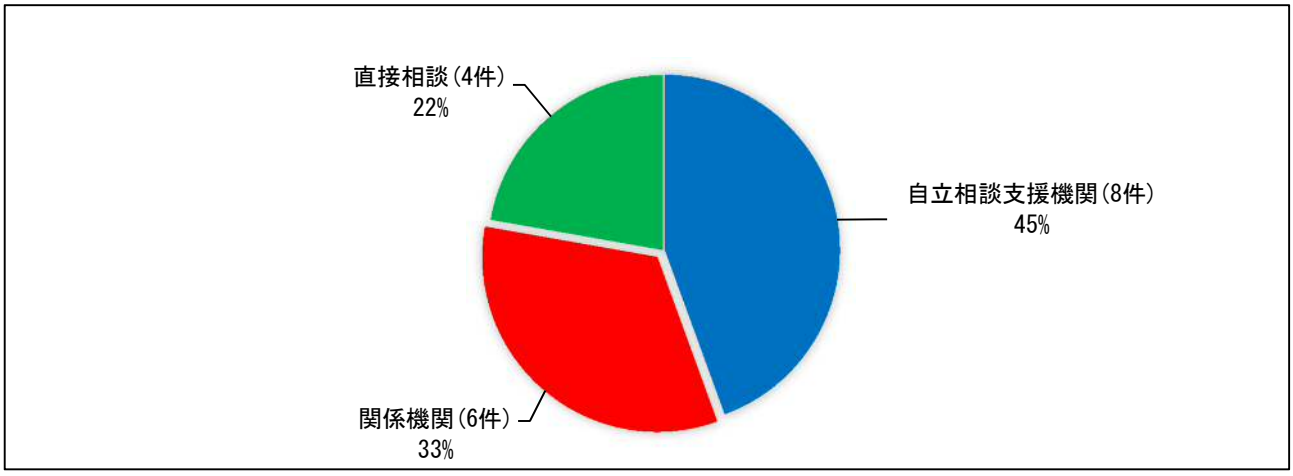
	対象者（年齢 性別）	支援期間	来所面談	電話メール	自宅訪問	他機関同行等	その他※
1	R2-J(30代男性)	22か月	18	60	0	10	14
2	R3-Y(50代男性)	12か月	20	40	2	5	43
3	R3-L(20代男性)	1か月	3	12	2	2	10
4	R4-A(50代男性)	2か月	5	15	0	0	12
5	R4-D(50代男性)	2か月	0	0	3	0	0
6	R4-E(30代女性)	2か月	3	6	0	1	9

※その他　寄ってカフェ、つどい場「くろまつ」、農作業、他機関協働の作業に参加等含む。

【図表1-2】就労準備支援事業利用者終結状況（全3件）

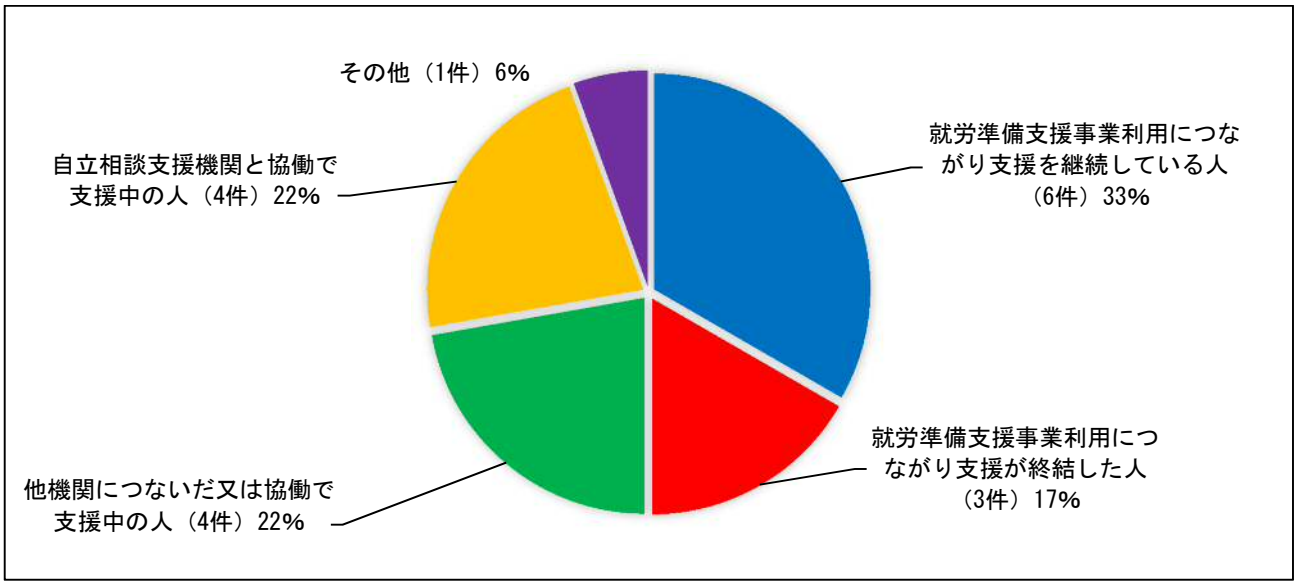
	対象者（年齢 性別）	支援期間	来所面談	電話メール	自宅訪問	他機関同行等	その他※	備考
1	R3-B(40代 女性)	12か月	12	35	0	4	3	福祉サービス利用へ R4.9月終結
2	R3-N(30代 女性)	12か月	8	30	1	1	35	福祉サービス利用へ R4.11月終結
3	R3-F(20代 女性)	12か月	14	48	0	4	2	福祉サービス利用へ R4.11月終結

【図表2】就労準備支援事業の窓口につながった経路（全18件）



経路の内訳は、自立相談支援機関からが半数近くを占めます。もう半数以上は若者相談センター「アサガオ」等の関係機関からの紹介や、学校訪問を行った高等学校、社協だよりで本事業について知り、来所される等、直接的に本事業窓口につながりました。

【図表 3】就労準備支援事業担当者が関わったケースの分類（全 18 件）



本事業担当者が関わったケースの半数が本事業利用につながっています。（終結したケース含む）

残りの半数のケースでは、自立相談支援機関や他機関と協働しながら本事業利用に向けた伴走型の支援を行いながら関わっています。ケースの中には、自立支援医療や障がい者手帳を所持していても、福祉サービスにつながっていない方がおられます。そのような方は、福祉サービスの中には、本人の希望するサービスがなく、「日中外に出る機会があまりない」「人との関わりに不安がある」などの思いを持たれています。障がいの有無に関わらず、つどい場「くろまつ」や農作業を通して、外に出る機会や人と関わる機会がもてる場が少しずつ増加しています。

【図表 4】就労準備支援事業未利用者への支援状況（全 9 件）

	対象者（年齢 性別）	来所面談	電話メール	自宅訪問	他機関同行等	その他	備考
1	R3-H(50 代男性)	0	0	4	0	0	障がい者相談支援事業と協働
2	R3-M(20 代男性)	3	4	0	0	7	阪神南障害者就業・生活支援センターと協働
3	R4-B(40 代男性)	2	0	0	0	0	自立相談支援事業と協働
4	R4-P(40 代男性)	1	0	0	0	0	自立相談支援事業と協働
5	R4-K(20 代男性)	1	2	0	0	0	自立相談支援事業と協働（若者相談センター「アサガオ」からの紹介）
6	R4-T(40 代男性)	2	0	0	0	0	自立相談支援事業と協働（若者相談センター「アサガオ」からの紹介）

	対象者 （年齢 性別）	来所 面談	電話 メール	自宅 訪問	他機関 同行等	その他	備考
7	R4-H（40 代男性）	0	0	0	0	4	障がい者相談支援事業と協働
8	R4-I（40 代男性）	0	0	0	0	8	自立相談支援事業と協働
9	R4-F(50 代男性)	1	6	0	0	18	障がい者相談支援事業と協働

※その他　寄ってカフェ、つどい場「くろまつ」、農作業、他機関協働の作業に参加等含む。

本事業未利用の状態で自立相談支援事業をはじめ他機関と連携して関わることで、対象者の状況の変化に伴い、本事業利用に至るケースがありました。

その他の項目では、つどい場「くろまつ」、農作業の活動の場ができたことで、本事業未利用の方とも定期的に関わる機会がもてるようになりました。

２　社会資源の開拓（芦屋社会福祉協議会・阪神南障害者就業・生活支援センターとの連携による）

【図表 5】ボランティア・見学・実習　可能事業所

	事業所名	所在地	内容
1	株式会社ブックサプライ	尼崎市	中古本、ＣＤ、ＤＶＤのピッキング等
2	あしや温泉	芦屋市	館内清掃
3	社会福祉法人 三田谷治療教育院	芦屋市	草花の手入れ、水やり　野菜作り
4	就労支援カフェ CACHE-CACHE(カシュカシュ)	芦屋市	喫茶作業
5	就労移行支援事業 ワークホームつつじ	芦屋市	作業補助
6	ＮＰＯ法人 日本レスキュー協会	伊丹市	犬の世話　事務作業等
7	ウェルネットさんだ	三田市	農業体験
8	婦木農園	丹波市	農業体験、酪農体験（合宿も可）
9	山村ロジスティクス	西宮市	食品等のピッキング
10	エルホーム芦屋	芦屋市	グループ活動体験（花壇のお世話、庭掃除）
11	株式会社プランツ・キューブ／ワーク・キューブ	芦屋市	喫茶作業、軽作業、パソコン操作
12	株式会社ポップ・アイディー	芦屋市	パソコン作業
13	芦屋市シルバー人材センター	芦屋市	事務作業
14	社会福祉法人 山の子会　芦屋アフタースクール	芦屋市	指導員補助
15	芦屋市保健福祉センター	芦屋市	消毒作業、花の水やり、植え替え
16	芦屋市立図書館	芦屋市	書架整理、除籍資料梱包、季節催事の飾りつけ作成や展示、PC 入力等、園芸、清掃
17	（株）リュリュ	芦屋市	内職作業の提供（期間限定）

	事業所名	所在地	内容
18	（株）潮芦屋マリーナエリアセンター	芦屋市	足湯の清掃、コンビニエンスストアでの清掃、品出し業務、敷地内の植栽等
⑲	公益財団法人　木口福祉財団	芦屋市	作業スペースの貸与
⑳	（福）明倫福祉会　愛しや	芦屋市	シーツ交換、消毒作業、タオルたたみ
㉑	生活協同組合　コープこうべ	芦屋市	めーむひろばでの仕分け、受け渡し作業等
㉒	（福）聖徳園 ・あしや聖徳園 ・ケアステーション　あしや聖徳園 ・養護老人ホーム　和風園	芦屋市	館内消毒、掃除、清掃、洗車（随時）、車いす掃除（メンテナンス）、フリースペースふらっと内の掃除、共用廊下、庭の掃き掃除、花の水やり、イベント時の準備、片づけ、館内の消毒

＊No⑲⑳㉑㉒は、今年度新規開拓した事業所

今年度は、4 件の就労体験先、作業スペース提供先を開拓しました。

開拓した就労体験先で、仕事の切り出しを行ってもらい、体験者の方のニーズに合わせての就労体験が実施できました。就労体験を経験することで、就労に向けた次のステップに進もうと考えられる方もおり、今後も本事業利用者と関係性を築きながら、実施していきたいと考えております。

３　対象者の状態像に対応できる支援メニューの多様化について

【図表 6】パソコン・タブレットの使い方

	項目	内容
1	パソコン・タブレットの基本操作	機器の立ち上げ、操作方法の説明・実践
2	ソフト基礎学習	Word の文書作成、案内の作成、表作成、Excel の表作成
3	求人の検索	インターネットによる仕事探しの方法について説明・実践
4	オンラインツールの活用	オンライン面談やオンライン面接に向けての練習で ZOOM を活用
5	職業について知る	職業情報提供サイト日本版 O-NET を閲覧しながら様々な職業について学ぶ。

【図表 7】グループセッション プログラム（ピアサポート活動）

開催月	テーマ	詳細
4	「働くときに大事なものってなにかな？」	働く時に大事なことを参加者同士で話し合う。
5	「作業をやってみよう！」	清掃・事務などの作業を用意して実施してみる。
6	「仕事を探してみよう！」	スマートフォン、PC を使用しての求人検索や、印刷した求人票の閲覧方法について学ぶ。
7	「面接を体験してみよう！」（1）	面接のポイントをおさえて、実践する。
9	「こんなときどうしよう？」（1）	就労場面での起こり得る、シチュエーション①への対応について学ぶ。
10	「こんなときどうしよう？」（2）	就労場面での起こり得る、シチュエーション②への対応について学ぶ。
11	「これまでの学びを振り返ろう！」	これまでの面接の振り返り、実演

＊令和 4 年 8 月、12 月は開催せず。

４　周知・啓発

今年度は近隣の高校(市内１校、市外２校)を訪問し、進路担当者等へ事業の案内を行いました。

自立相談支援事業担当者、家計相談支援事業担当者と連携して訪問しました。

継続して学校訪問することで、近隣の高等学校の在学中の生徒に対して、「働くための準備」としての出前講座や、家計相談支援事業担当者による「お金に関する講座」を実施することができました。

今後も学校との連携を継続し、本事業でできることの周知・啓発や、今後困ったときに気軽に相談できるような関係づくりを推進していきたいと考えています。

５　成果と課題

(1)　成果

ア　地域での居場所・役割について

継続して市内の地域活動支援センターの協力を得て「寄ってカフェ」を毎月開催し、延べ20名の利用がありました。（都合により保健福祉センターの高齢者交流室で開催することもありました。）

寄ってカフェに定期的に来られる方から、「ゆっくり話せて良い」という意見をいただいています。

農作業を実施することで、これまで家から出ることが困難であった方が、外に出るための一歩を踏み出すきっかけにつながりました。

前年度から継続して、週に１回（月曜日）定期的に通うことができる、つどい場「くろまつ」を計28回開催し、延べ81人が参加されました。つどい場「くろまつ」においては、家計相談支援事業担当者と連携して「お金に関する講座」を開催し、自立相談支援事業担当者、地域の協力員と協働して「家事講座」を行いました。他機関や地域住民の方に協力いただき、参加者のニーズを確認しながら実施ができました。

継続した取組として、第３または第４月曜日に協力事業所の講師の協力のもと、「体操教室」を開催し、参加者の方からは「運動する機会になって良い」という感想をいただいています。

イ　周知・啓発について

今年度は自立相談支援事業担当者、家計相談支援事業担当者と連携して近隣の高校へ訪問し、事業の説明だけでなく、実際に在学中の生徒に対して、出前講座を実施することができました。

ウ　就労支援について

就職に向けてハローワークへの同行、面接練習、履歴書の作成等を行いました。

仕事に対してのイメージを持つことが難しい方、働くことに不安がある方に対しては、本人の状況や希望やニーズを確認しながら就労体験を実施しました。

エ　相談支援体制の機能強化について

自立相談支援機関、家計相談支援機関など他機関との連携強化を図り、潜在化している方とも関わる機会が増加しました。現段階では、就労準備支援事業の利用が難しい方に対しても、他機関と連携しながら、将来的に本事業の利用につながるよう支援を行っています。

今後も、関係機関への周知・啓発を行い、相談者にとって有益になるよう、支援のネットワークを広げていけるよう、体制づくりに努めていきます。

オ　コロナ禍での支援について

可能な範囲で電話やメールでの支援を行い、対面で面談をする場合は、感染症対策を行った上で実施しました。コロナ禍で不安が強く家から出にくい方に対しては、感染症対策を行ったうえで、自宅へ訪問することで対応しました。

(2)　課題

ア　地域での居場所・役割について

寄ってカフェでは、家から出にくい方の利用が少ないため、今後は開催方法も検討しながら進めていきたいと考えております。

外出することに一歩踏み出せた方が、自身の居場所であることを感じられたり、役割を持つことができる場の創出の必要性を感じています。

イ　周知・啓発ついて

学校関係への事業説明だけでなく、市内の企業や関係機関についても理解を得られやすいよう、本事業の取組内容について、丁寧な説明やニーズの聞取りを引続き行っていきたいと思います。

ウ　就労支援について

今年度は、3 件の就労体験を実施しました。参加者のニーズに応じて、協力事業所に仕事を切り出してもらうことで、参加者の方が「できること」「できそうなこと」など、無理のない範囲で取り組むことができました。今後も、就労体験に参加される方が、体験を通して役割や自信につながる経験になるよう、多様なニーズに対応できるように就労体験先を開拓していきます。

また、潜在的に就労についての悩みを持っている方に対して、就労に関するセミナー等の実施を検討していきたいと考えています。

エ　相談支援体制の機能強化について

自立相談支援機関の支援対象者に対して、初期段階から面談に入ることや、若者相談センター「アサガオ」、高等学校との連携で、6 件が本事業の利用につながりました。本事業の利用に至

っていない支援対象者に対しては、資源を活用したプログラムの創出や居場所を通しての関わりを行いながら本事業についての理解を促し、利用者の増加に努めたいと考えています。

オ　コロナ禍での支援について

対面での支援が難しい状況における支援方法として、電話やメールに加えて、オンラインでの面談、面接練習など、個々に合わせた方法で今後も支援を実施していきます。対面での面談の際にも、継続して感染症対策に努めながら実施していきます。

事例『就労準備支援事業利用事例』

（※事例内容は本人が特定されないよう、修正しています。）

●事例の概要

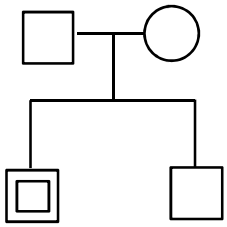
本人…20 代男性。高校時代から不登校。本人、母、父、弟の４人家族。

若者相談センターで実施しているひきこもり親の会に就労準備支援事業担当者が参加した際に、母から個別に相談を受け、本事業につながる。

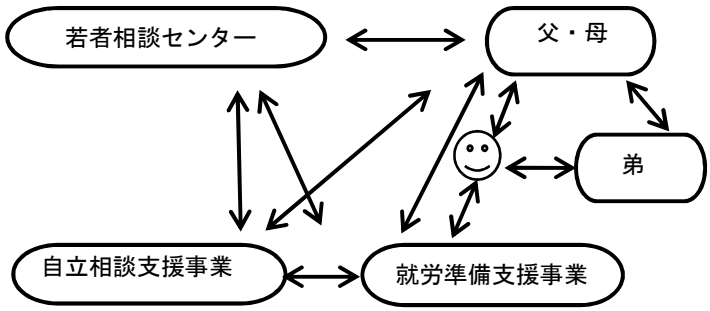
後日、自立相談支援事業担当者同席で母と面談実施し、「本人と会って欲しい。」と希望あり。

母から本人にお話しして頂き、本人に了承を得て自立相談支援事業担当者と一緒に自宅訪問する。

●ジェノグラム



●エコマップ



●インテーク・アセスメント時の本人の課題

【生活歴等】

・小学校、中学校の頃は友人にも恵まれ学校に行くことができており、野球チームにも所属していた。
・高校に入ると、仲の良かった友達と離れ、馴染むことができずに１年生の頃から不登校になる。
・そのまま、高校を中退し、ひきこもり状態となる。
・自宅では好きな野球チームの試合を観戦したり、夜にランニングに行くという生活を送っている。
・本人に困り感はなく、やりたいことは特にない。
・夜遅くに就寝し、不規則な時間で起床する。
・同居の母、父、弟との関係は良好。
・弟とは一緒にスポーツ観戦をしている。

●支援の方向性

・まずは本人に会えたことを大切にする。
・本人が会っても良いと思えるような関係づくりを自宅訪問を重ねながら築いていくように努める。
・好きなこと、興味のあることを共有する。
・好きなこと、興味のあることが聞けたら、一緒にしてみないかを提案したり、引っ込めたり、様子をみながらすすめてみる。

●支援経過	●支援プラン
R3.11 初回自宅訪問。 自立相談支援事業担当職員と一緒に訪問する。 最初は、母同席でお話しする。母が離席し、本人とお話しする。 「世間的にはちょっと違うかもしれないが困っていることはない。」 とお話ししてくださる。 人と話すことに緊張することや、好きな野球チームについて教えて くださる。 「今後も訪問して良いですか？」と職員が聞くと 「はい。」と返答して下さる。	自宅訪問
R3.12　自宅訪問 本人のみと最初からお話しする。 野球チームに関することや、日常生活のことについてお話しする。 1 間ほどお話しして退室する。 R3.12　母より受電。 家族以外と、たくさん話す様子をみて嬉しく感じたと連絡を下さる。 次にいつ職員がくるか気になっている様子を教えて下さる。	自宅訪問 電話連絡
R4.1　自宅訪問 母、本人に新年のあいさつをする。 本人のみとお話しする。 今年の目標を聞いてみると、 「自分にかかるお金などはできれば自分でなんとかしたい。」と 本人の思いを聞くことができた。 そのためにはどうすれば良いかお話しすると、 「どうしたら良いかわからない。」と返答があった。 今後の話しは切り上げて、野球の事や、日々の出来事について 話をして退室する。	自宅訪問
R4.2　自宅訪問 本人のみとお話しする。 変わらず、ランニングは継続できている様子。 職員も野球をしていたので、 「一緒にキャッチボールでもしませんか？」と提案してみる。 「公園には人がいるので・・・」とあまり乗り気ではない様子。 別の提案をしてみる。 「畑作業を考えていて、これから、野菜やお花を植えていこうかと考え ており、少し手伝ってほしいと思っている。」と職員が話すと、 「それならいいですよ。」と返事が返ってくる。 これまでは母を通じて連絡を取っていたので、 これからに向けて、本人用の電話番号、メールアドレスを教えて もらうことができた。	自宅訪問

●支援経過	●支援プラン
R4.3 畑に来ることができ、二人で一緒に土づくり、草引きを実施する。 口数は少ないが、黙々と取り組まれ、感想を聞くと、 「どちらかというと嫌じゃない。」「次も行けます。」と返事あり。 農作業を通して外に出る事ができたことを本人と共有する。 本人、母、就労準備支援事業担当者、 自立相談支援事業担当者と保健福祉センターで面談実施。 拒否なく面談に参加できた。今後について本人からは、 「まだ動き出したばかりでわからないが色々やってみようと思う。」と 今の気持ちを確認することができた。	農作業プログラムの実施 面談
R4.4～10 継続して週に１回程度一緒に農作業を実施する。 他にも内職作業の声掛けをすると応じて下さったので、 一緒に内職作業も実施。 手先が器用で丁寧に仕上げられていた。 一緒に作業をすることで本人の様々な側面を知る機会になっている。	農作業プログラム 内職作業プログラム
R4.11～ 「働くイメージが持てない。」という発言があり、就労体験を実施 してみることとなる。 就労体験先で、できることが増えてくることで「緊張せずにできた」 と少しずつ言葉数の増加、表情の変化みえる。	就労体験

●支援の効果
・自宅訪問から始まり、まずは本人の気持ち、好きなこと、興味のあることを知ることができた。農作業をきっかけに外に出ることができ、外に出られるようになってからは、意欲的に活動することができた。 ・支援員に会おうと思ってくれたこと、提案したことに飛び込んでみようと思ったこと、その選択一つ一つが本人自身で考え行動することができたので、そのきっかけづくりのお手伝いができたように思う。 ・手先の器用さ、コツコツ一つの作業に取り組めることなど一緒に作業をすることで、面談だけではわからないことがわかる機会になった。

●支援を通じた地域課題等
・きっかけやタイミングがあれば、次のステップに進んでいける方もいるので、地域の中で体験できるところ、チャレンジできる環境、自分らしく過ごせる居場所が充実していくことが選択肢の幅を広げることができると感じる。そのためには、まずは、支援員自身が地域の資源を知り、必要としている方とをつなげる役割を担うことが大切ではないかと思う。